有珠山

1　概況

火山活動に変化はなく静穏に経過しました。

2　噴煙活動の状況

西山西麓（N）火口群のN-B火口の噴煙は、風が弱いなど気象の影響により時折高く観測されましたが、概ね火口上 50m以下で推移しました。山頂火口原、昭和新山でも特別な変化はありません。金比羅山（K）火口群の噴気は観測されませんでした。

3　地震活動の状況

地震回数は 1 日あたり 0～6 回で推移しました。震源はほとんどが山頂火口原の浅いところ（深さ 1km 前後）と推定されます。火山性微動および空振は 2001 年 9 月以降観測されていません。

月別地震回数（A点）

2002～2003年	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月
地震回数	18	23	26	17	19	21	18	24	22	29	21	28
微動回数	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

4　地殻変動の状況

西山西麓を中心とする収縮傾向は 2002 年春頃まで鈍化しながら続いていましたが、その後の変化は、1980 年代から続いている山頂部の定常的な沈降に伴う動きを表していると考えられます。

5　上空からの観測結果

4 月 18 日に北海道開発局の協力により実施した上空からの観測では、西山西麓火口群の N-B 火口で噴気活動が継続していたほか、N-C 火口およびその西側の地熱地帯で弱い噴気が認められました。金比羅山火口群の K-A 火口および K-B 火口は水溜まり状態となっていました。山頂火口原のＩ（アイ）火口・小有珠南東麓・銀沼火口では白色の噴気活動が続いていました。

6　調査観測の結果

4 月 21～26 日に調査観測を実施しました。

【K 火口群】

K-A 火口および K-B 火口の熱水湧出は停止し、火口壁やその周辺に弱い噴気が残っている程度でした。

【N 火口群】

N-B 火口では火口縁の崩落が進んでおり、火口底の 2/3 程度は水溜まりとなっていましたが、南側の火口壁下部で噴気活動が継続しています。赤外放射温度計で北側火口縁から測定した最高温度は 145℃（放射率 1.0、測定距離約 80m）と引き続き高温を維持しています。

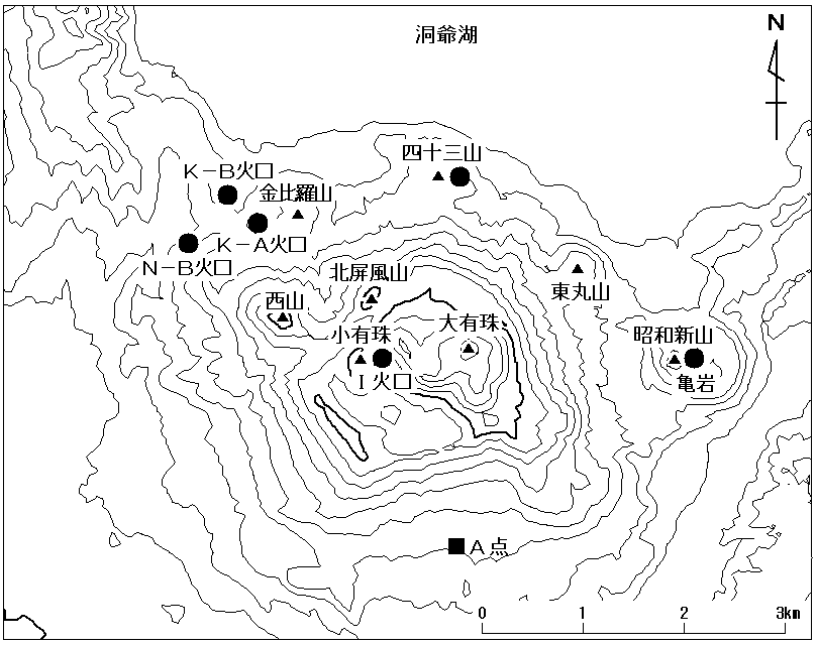
【山頂火口原】

Ｉ火口では、多数の噴気孔から弱い刺激臭を伴う火山ガスを勢いよく噴出しています。噴気温度は最高 366℃（昨年 10 月 392℃）で高温の状態が続いていますが、長期的にはやや低下傾向にあります。

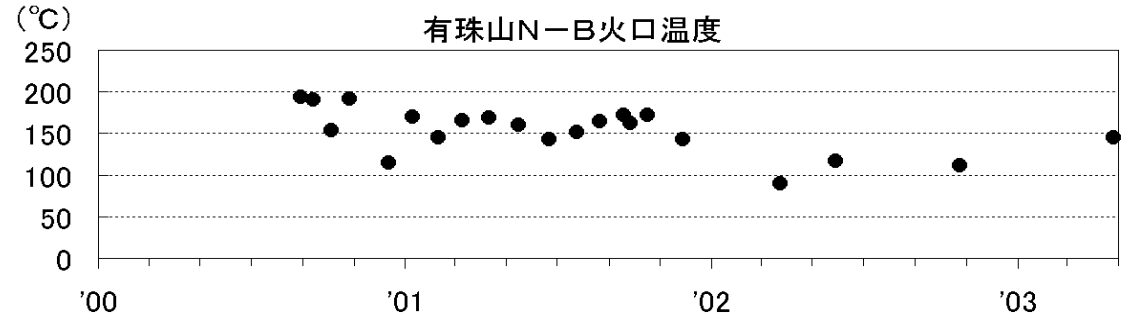
【昭和新山】

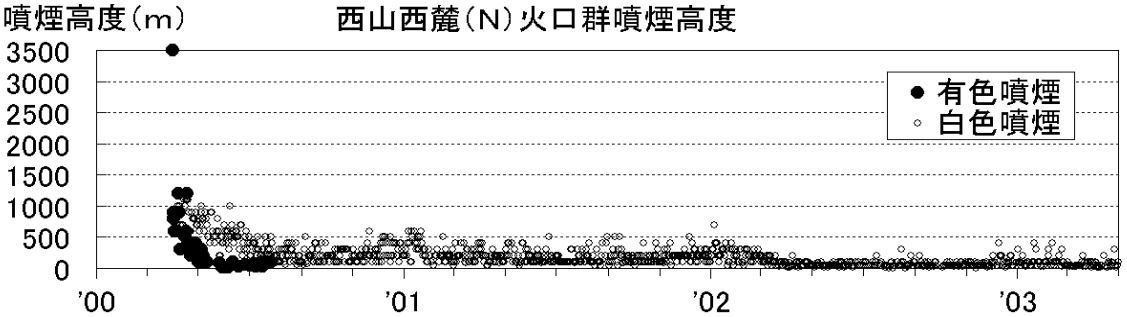
亀岩の噴気温度は最高 150℃（昨年 10 月 164℃）、亀岩南側噴気帯は 271℃（昨年 10 月 289℃）と高温を維持していますが、長期的にはやや低下傾向にあり、噴気の勢いも弱い状態です。

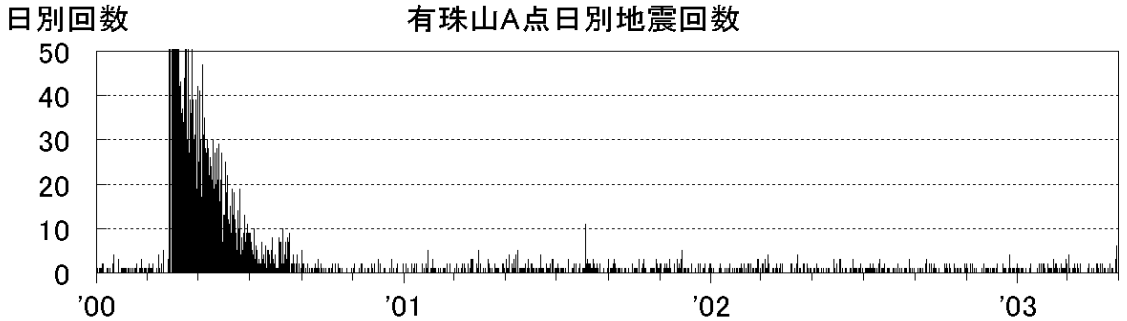
【四十三山】
南東斜面の噴気孔は 54℃（昨年 10 月 54℃）で、弱い噴気の状況などに変化はありません。



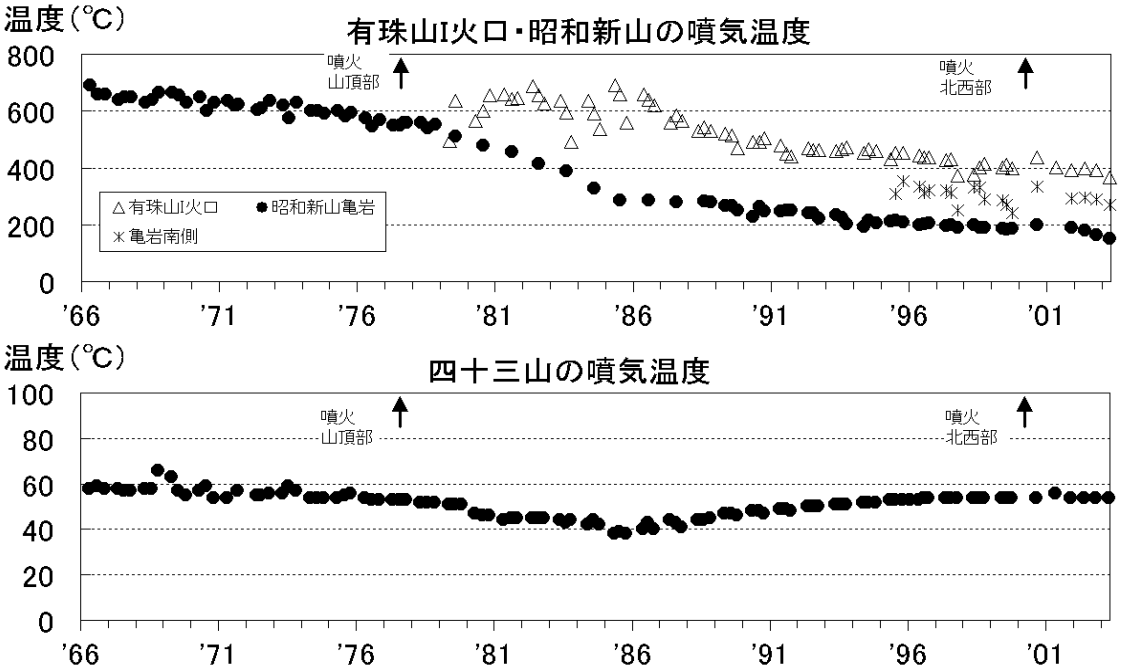
有珠山周辺図



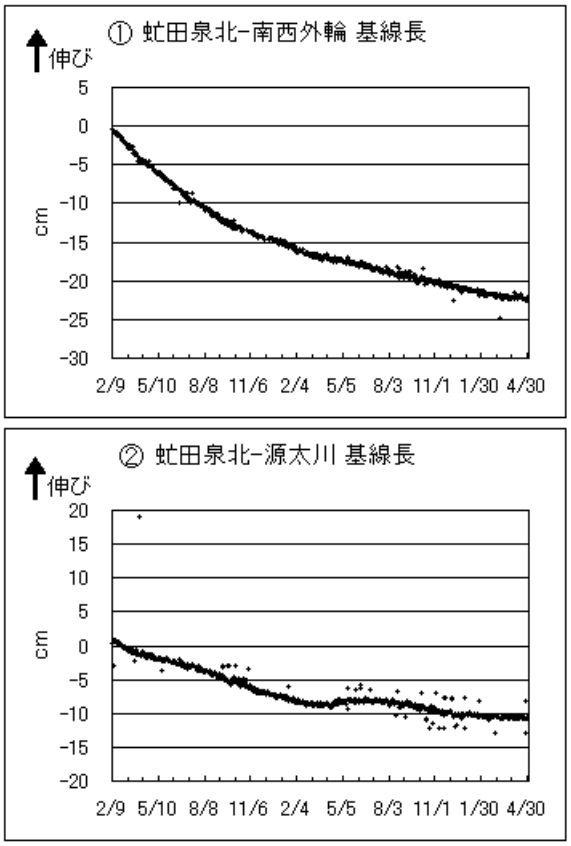


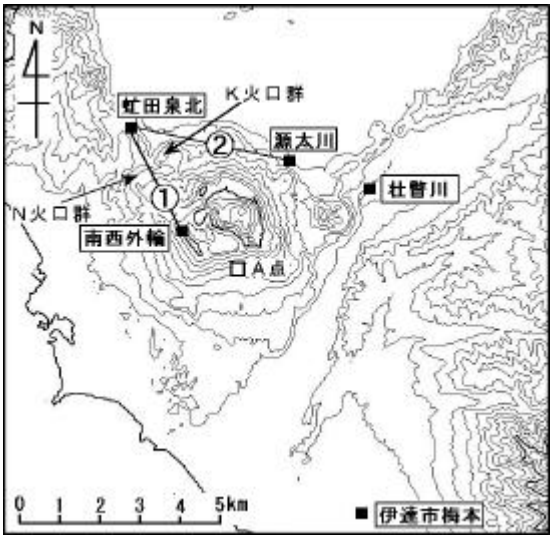


有珠山火山活動経過図（日別、2000 年 1 月 1 日～2003 年 4 月 30 日）

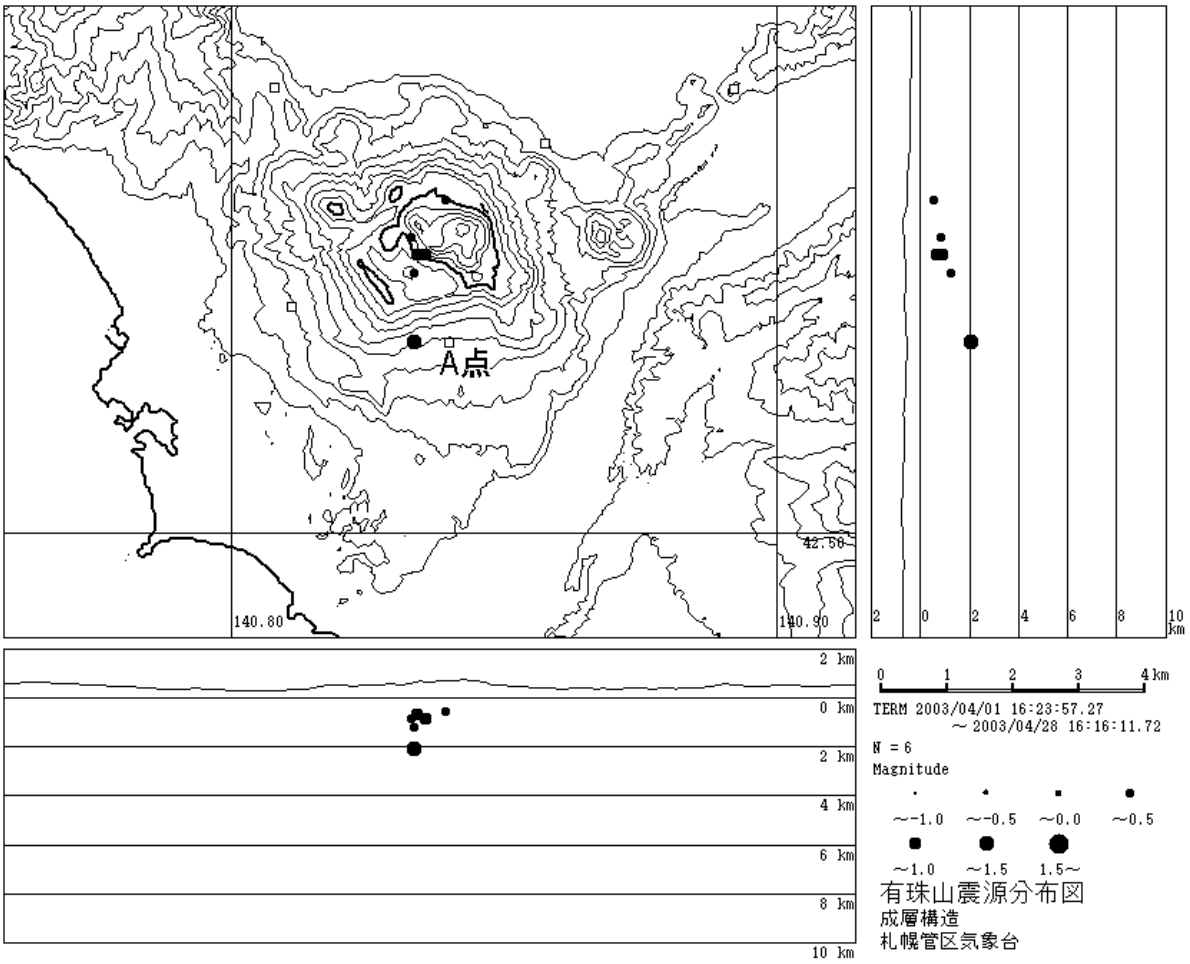


有珠山噴気温度の推移（1966 年 1 月～2003 年 4 月）



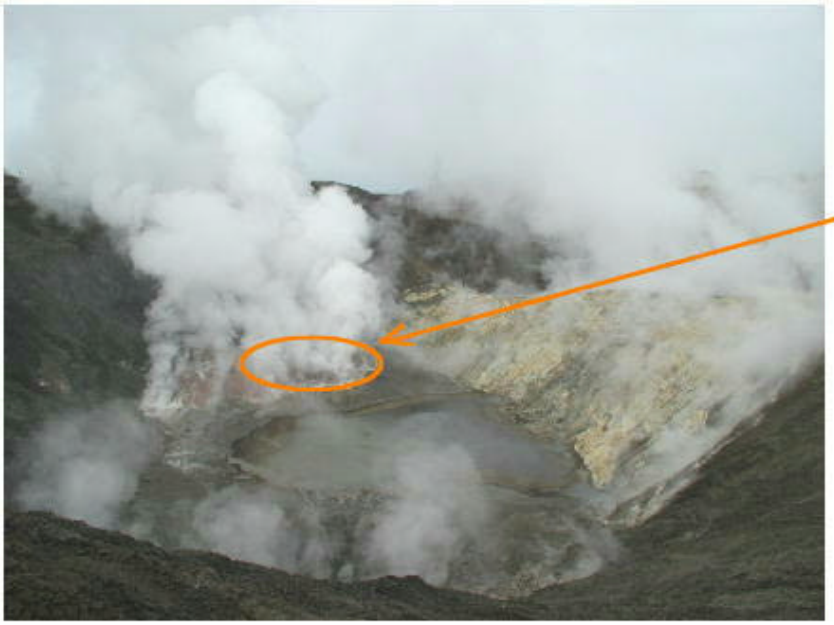


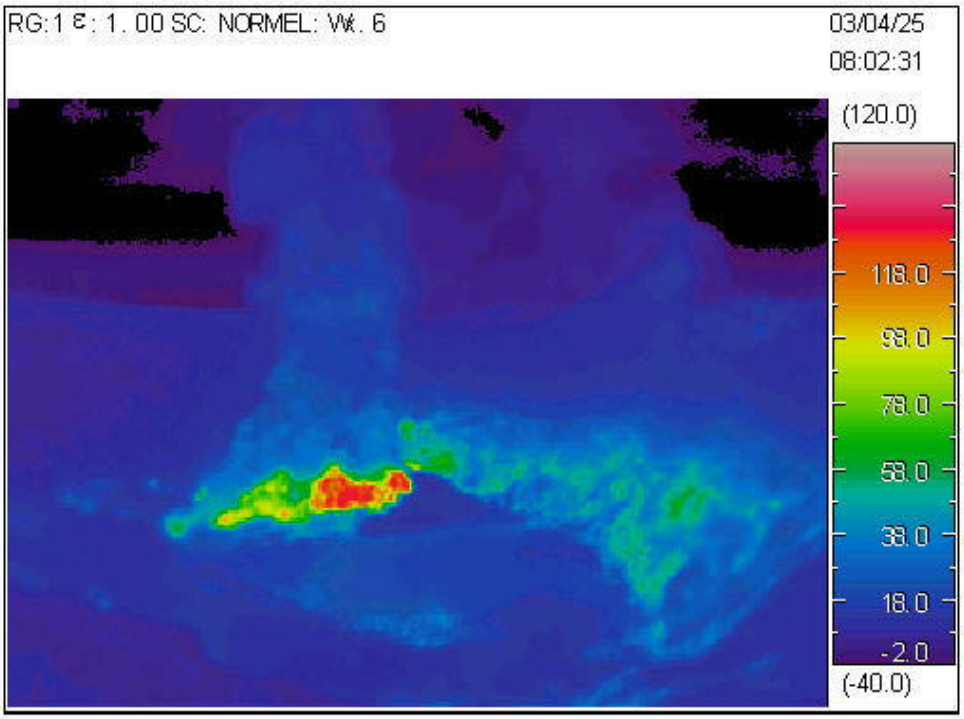
有珠山基線長変化（2001 年 2 月 9 日～2003 年 4 月 30 日）



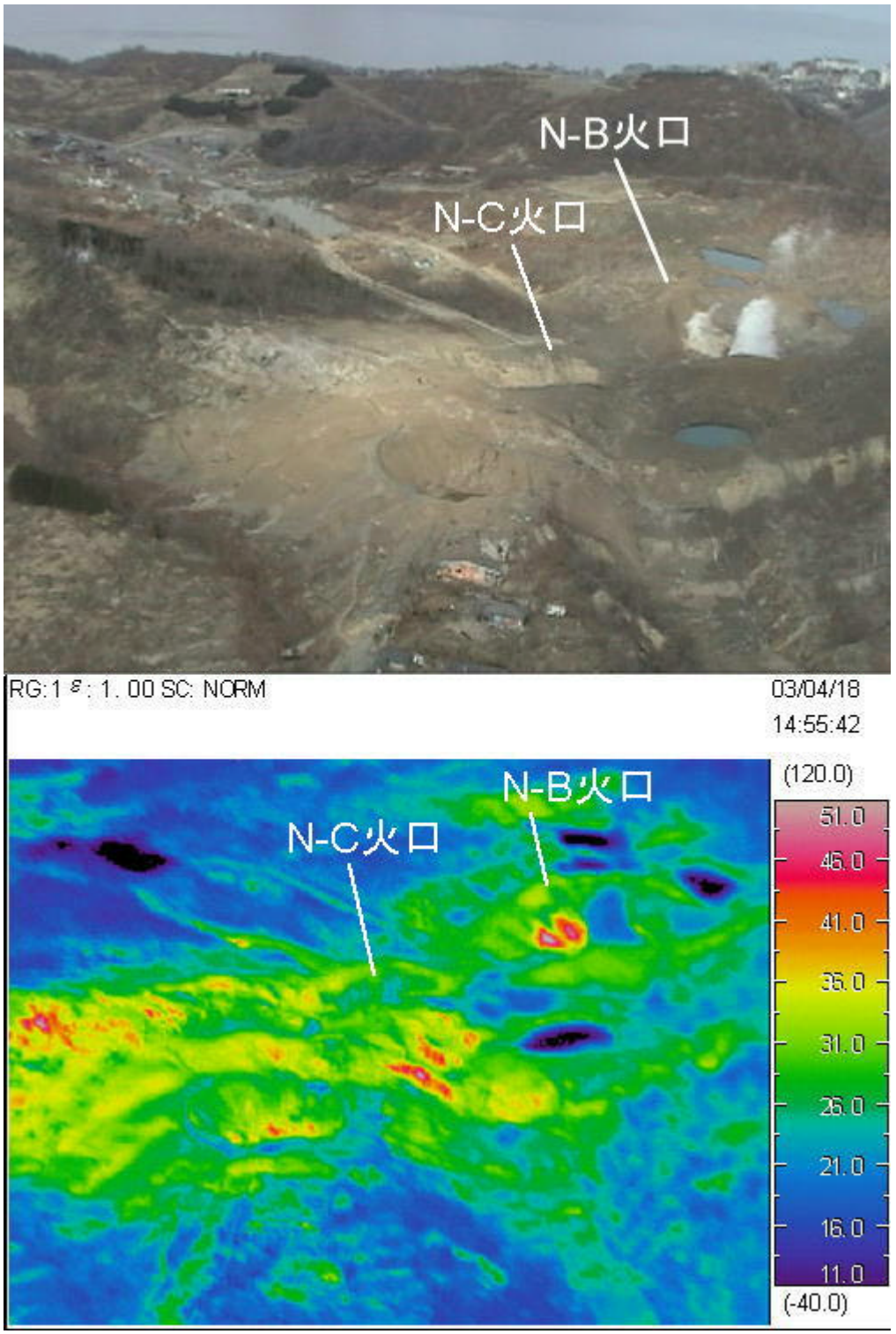
有珠山震源分布図（2003 年 4 月 1 日～4 月 30 日）□印は地震計

西側から見た K-A 火口内の様子（2003 年 4 月 23 日）





北東側火口縁から見た N-B 火口内の赤外熱映像（4 月 25 日 08 時 02 分、天気曇り）
写真の変色域に対応して温度の高い領域が認められます。



南側上空から見た西山西麓（N）火口群の赤外熱映像
（2003 年 4 月 18 日 14 時 55 分、天気晴れ：北海道開発局のヘリコプターから撮影）

N-B 火口の噴煙は高温域として表現されているほか、N-C 火口の周辺に広がる地熱域が黄色～赤色の領域として認められますが、一部日射の影響もあります。